

二の上

春のうた・夏のうた

朝日新聞社

大岡信

新編

折々のうた

3



新編・折々のうた 3

朝日文庫

1992年 2月15日 第1刷印刷

1992年 3月1日 第1刷発行

著 者 大岡 信

発 行 者 木下 秀男

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(3545)0131 (代表)

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

© Makoto Ooka 1985 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-260686-X

まえがき

文庫本『新編・折々のうた』第三卷（二の上）・第四卷（二の下）は、同じく朝日新聞社から刊行されている大型愛蔵本『新編・折々のうた 第二』の文庫化された新装本である。ここに収められているのは、一九八二年三月十五日から八四年三月十五日まで、丸二年間にわたって朝日新聞朝刊に連載された「折々のうた」で、新聞連載時の文章に若干の書き加えや修正を行ったものである。

大型愛蔵本がこのほど安野光雅さんのすばらしい装幀に飾られ、こういう形で文庫化された経緯については、第一巻冒頭の「まえがき」で書いた通りである。また第四巻の末尾には、大型本刊行の時に「あとがき」として書いた拙文を掲載してある。できればこの巻に続いて第四巻をもお読みいただければ、著者としてこれに過ぎる喜びはない。

一九九一年十二月

著者

目次

まえがき

春のうた 5

夏のうた 107

作者略歴（兼索引）

春のうた

珍らしき春にいつしか打ち解けてまづ物いふは雪の下水したみづ

みなものより
源頼政

『頼政集』春。平清盛の横暴を憤って挙兵したが宇治で敗れ、平等院に自決した源三位頼政。宮中で怪鳥鷲めえを射落とした武勇談は有名である。武骨ぞろいの源氏武者中抜群の歌人だった。歌風は率直で情感に富む。一年ぶりの珍客春の訪れにおのずと「打ち解け」（氷が解けの意に、うち寛くわいでの意が重なる）話しかける雪どけの下水。氷の下を行くせせらぎに、春に語りかける最初の声を聞く心躍りは、昔も今も変わらない。

雪とけてくりくりしたる月夜かな

こばやし
小林一茶

『七番日記』所収。北信濃の農民の子一茶は、俳諧宗匠として立つべく青・壮年期を江戸で苦闘したが、志成らず五十代初めに帰郷、六十五で死去した。流転の悲哀、処世の苦しみ多い生涯だったが、句には天性不屈の精神のもつ明るさ、開放感がある。南国の人にとっては珍しさと楽しさを運んでくる雪だが、一茶の句には、雪への憎しみの句も多い。「雪ちるやおどけも言へぬ信濃空」。それだけに雪どけの喜びは格別だ。「雪とけて村一ぱいの子どもかな」。

谷風に解くる氷のひまごとにうち出づる波や春の初花

みなものまき
源 当 純

『古今集』卷一春上。『古今集』が完成した十世紀初頭のころの人。右大臣源能有の子で少納言、従五位上。早春の歌である。「谷風に解くる氷」は、春になると暖かい風が東から吹いて氷を解かすという中国伝来の暦の知識「東風解氷」を踏まえる。春風に解けはじめた氷の裂け目ごとに白波が躍り出る。まだ花も咲かない早春の、これこそ初花ではなからうか、と。着想に心躍りがあって楽しい。

春日野に煙立つ見ゆ娘子らし春野のうはぎ摘みて煮らしも

よみ人しらず

『万葉集』卷十所収。「娘子らし」のシは強めの助詞。早春の春日野に煙が立つのが見える。きつと乙女らが春の野のウハギ（ヨメナの古名）を摘んで煮ているのだろうよ。古代から、うら若い乙女が若菜を摘んで作ったあつものを食べると、長寿を保てるという信仰があった。仙女が不老不死の仙薬として若菜を食べたという、中国伝来の神仙思想も当時好まれていて、万葉卷十六に竹取の翁とあつものを煮る九人の乙女、実は仙女の応答を詠んだ作例がある。

菜を摘まば 沢に根芹や 峰に虎杖 鹿の立ち隠れ

閑吟集

春の若菜摘みをうたう。ただしセリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロのいわゆる春の七草には含まれていない若菜を歌って新鮮味がある。菜を摘むなら、沢に下れば根芹がある。峰にのぼればイタドリや、別名「鹿の立ち隠れ」のウドもあるよと。沢に対するに峰、虎に対するに鹿。しかもどうやら、イタドリという語には、音からすれば峰のトリまで隠れていそうさ。さりげなく言葉で遊んだしゃれた歌謡。

陽炎や取りつきかぬる雪の上

山本荷兮

『猿蓑』所収。生地名古屋で医を業とした芭蕉門俳人。蕉門の七部集のうち最初の三集（『冬の日』『春の日』『阿羅野』）を編むなど重要人物だったが、やがて蕉風に反目、蕉門俳人らと対立し、孤立の晩年だった。春の雪が降ったあと、空が晴れ渡る。陽光が雪に照り映え、見ればうらうらと暖かい日ざしに、陽炎があちこちゆらめいている。「取りつきかぬる」は、雪につかず離れずの陽炎の揺れをとらえて面白い表現になっている。

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

島木赤彦 しまぎあかひこ

『太虚集』（たいきよ）（大二三）所収。「諏訪湖畔」と小題にある。現在も同じ場所にあるが、赤彦の家は信州の諏訪湖を斜め前方に見おろせる位置にあった。彼は湖水を愛して数々の秀歌をのこしたが、中でも一、二を争うのがこの歌だろう。張りつめていた氷は少しずつ解けはじめたが、寒さはなお厳しい。空にかかった三日月が、糸のように繊細な姿を湖の波に映してたゆたっている。光ともいえぬ光を発して静まる、その幽遠の影。

笹折りて白魚しらうをのたえだえ青し

椎本才磨 しいのもとさいまろ

『東日記』所収。芭蕉と同時代の俳人。談林派から出て一時江戸で芭蕉や池西言水と交友、談林以後の新風を競った。この句は五五七でつくられていて、過渡期の実験意欲を感じさせる。しかしもちろん、肝心なのは句の出来映えである。「笹折りて」は籠に笹の葉を折り敷いたさま。その上に、すくいとった白魚をのせる。葉の緑が白魚の半透明の体を透かし、「たえだえ」に青い。このたえだえの青さは、浅い春の色だ。

春寒し水田の上の根なし雲

かわひがしへきごどう
河東碧梧桐

『新俳句』（明三二）所収。明治六年松山市生まれ、昭和十二年没の俳人。同郷の先輩子規を中心に虚子とともに盛りあげた俳句革新運動では、大きな足跡を残したが、新傾向唱導以降の歩みは、虚子の花鳥諷詠思想の隆盛に比して孤影が著しい。右は初期の作で、子規も佳句とほめた句。景も情も特に工夫をこらしてはいないが、この根なし雲の透明感はいかにも「春寒し」。後世から見ると作者の一生を暗示するようにもみえる。

春の寒さたとへば露の苦みかな

なつめせいび
夏目成美

『成美家集』所収。江戸後期の俳人。「俳諧独行の旅人」を自称したが、洗練された作風で江戸の大家と仰がれる。浅草蔵前の富裕な札差で、一茶はじめ俳人の面倒をよく見た。十八の時右足の自由を失い、一時不随斎と号したりした。そんな身体条件も感覚を一層鋭くさせるように働いたかもしれない。この句、春の余寒をたとえて、さしずめ露の苦みか、と。譬喩につきものの理の働きを上回る感覚のよさですっきり納得させる手腕。

如月も尽きたる富士の疲れかな

中村苑子

『水妖詞館』（昭五〇）所収。大正二年静岡県生まれの俳人。「黄泉に来てまだ髪梳くは寂しけれ」など想像世界に自由に出没する句が多い。この句は、若い日には故郷伊豆で毎日見慣れていた富士山に、ある日ふと見た別の顔を詠む。冬の間中白雪におおわれて、清浄かつ威厳にみちていた富士が、二月も末ごろになると、どこか疲れたような表情をみせる。それは春の到着を告げる変化だが、落魄感も漂う。季節の転移を鋭敏な表現でとらえて印象的。

春さむき梅の疎林をゆく鶴のたかくあゆみて枝をくぐらず

中村憲吉

『軽雷集』（昭六）所収。明治二十二年広島県生まれ、昭和九年没の「アララギ」歌人。「梅林の鶴 岡山後樂園所見」と題する一連の一首。早春、花もまばらな梅林の鶴。枝があっても首をきげてくぐることはせず、ゆっくり横をまわって、たかだかと歩み続ける。「たかくあゆみて」一句が、鶴の気品ある姿態をとらえてみごとである。同じ一連の作に、「梅林の外にでて鶴は羽ばたけり芝生につくる影のおほきさ」。

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる

紀友則

『古今集』春上。「梅の花を折りて人におくりける」とある。あなた以外のだれに見せようか、この梅の花を。色も香も深く味わえる人にしか味わうことはできないものを。親しく敬愛している人に梅を贈ろうとして、梅の花をたたえつつ、実はそれ以上に相手をたたえることに心を尽くした歌。たかが梅の枝程度で思うのは、現代人の心の浅さだろう。「しる人ぞしる」という表現は、たぶんこの古歌によって、日本語に根づいた。

ただ吟じて臥すべし梅花の月 仏となり天に生ずれど すべて是れ虚

閑吟集

室町歌謡。原文は漢文。日本の歌謡では古くから漢詩句が愛誦された。室町は禅林のいわゆる五山文学が栄えた時代だから、当時の歌謡を集めた『閑吟集』にもこのような漢詩句がいくつも流れこんでいる。「月下の梅花をめでつつただ詩を吟じて寝ころべ。成仏して天界に生まれかわるなど、所詮は虚であり無であるにすぎぬ」と。世上の価値観を禅的に一転させ、虚無と風狂を推賞する所が痛快。

梅の奥に誰^{たれ}やら住^すんで幽^{かす}かな灯^ひ

夏^{なつ}目^め漱^{そう}石^{せき}

『漱石全集』所収。明治三十二年二月作。「正岡子規へ送りたる句稿」その三三」の中の一句。漱石は熊本の五高講師になって三年目だった。この月には「梅花百五句」と題し、東京の子規あて一挙に百五もの梅の句を送っている。梅の香の漂う夜の庭。すかし見ると林の奥の方にかすかに灯火が洩れて、だれか知らん、ゆかしい人がひっそり住んでいるらしい。愁いを帯びたあこがれの気配がたゆたう。

主^{あるじ}なくこの梅呉^くれし友もなしおのれひとりが白梅とゐる

林^{はやし}圭^{けい}子^こ

『ひくきみどり』（昭五二）所収。明治二十九年東京生まれの歌人。故窪田空穂の夫人で、歌の弟子でもあった。空穂は昭和四十二年春没したが、これはその三年後の早春の歌。友人から贈られ、亡き夫が大切にしていた鉢の白梅を歌う。淡々と詠まれているが、下句には敬愛してやまぬ人を喪った寂しさが溢れ、しかも気品が漂う。「心たしかにもたねば空穂嘆かむとひとりいましめひとりさびしむ」。

梅の香や没日^{いりひ}に顔を消されつつ

小檜山^{こひやましげ}繁子^こ

『蝶まんだら』（昭五九）所収。昭和六年樺太生まれの俳人。加藤楸邨に師事する。女学校在学中に終戦、内地に引き揚げた。故郷喪失の痛みを「故郷^{ふるさと}は轍^{わだち}にかかる蝶の翅^{はね}」のような句に鋭く詠む。肺葉切除手術を受けて療養中に俳句を始めた。右の句、梅は花の香りを特に愛される木だが、その香に全身包まれつつ夕暮れの底に沈みこんでゆく感覚を、「没日に顔を消されつつ」と言ったのは、鋭敏な発見。

母の魂^{たま}梅に遊んで夜は還る

桂^{かつら}信子^{のぶこ}

『新緑』（昭四九）所収。大正三年大阪生まれの俳人。日野草城に師事した。「ひとづまにゑんどうやはらかく煮えぬ」「窓の雪女体にて湯をあふれしむ」などの初期の句で存分に女性の官能的感覚を表現したが、右の句は近年の作。老いた母堂を喪った折の「母容態悪化」一連から。遊魂という語が句と化して薄明界に舞うような、ふしぎな幻想性がある。「花冷えの壺が吸ひこむ母の息」のような作もある。

簷雨^{えんう}まで薄紅梅^{うすこうばい}と知らざりき

安東^{あんどう}次男^{つぐお}

『昨^{きのそ}』（昭五四）所収。大正八年岡山県生まれの詩人・批評家。大学時代加藤楸邨に師事して作句。俳諧文学の研究・評釈の仕事でも知られる。「簷雨」は軒ばにかかる雨。訪問先の知人の家でもあろうか、梅が咲いているとは知っていたが、ふと雨が降りだして軒を振り仰いだ時、細かい雨を見やると同時に、梅がほのかな薄紅梅であることに初めて気づいたのだ。物が見える瞬間の機微にふれる句。